

僕がかわいがるから

小川未明

青空文庫

正しょうちゃんの、飼かっている黒くろ犬いぬが、このごろから他家よその鶏にわとりを捕とつたり、うきぎを捕とつたりして、みんなから悪にくまれていました。こんどやってきたら、鉄砲てつぽうで打ち殺ころしてしまうといっている人ひともあるくらいです。けれど、正しょうちゃんは黒くろ犬いぬをかわいがっていません。

「クロや、もう僕ぼくといっしよでなければ、出ださないよ。ひどいめにあうからね。」と、いつてきかせました。

クロは、尾おを振ふって、正しょうちゃんの体からだに頭あたまをすりつけて、クン、クンと喜よろこんで鳴ないていました。

「わかれば、もういいのだよ。僕ぼくは、おまえをかわいがってやる

から。」と、いって、クロの頭あたまを抱かかえて、その顔かおに自分じぶんのほおをつけていました。

しかし、お父とうさんや、お母かあさんは、クロを捨すててしまうといつていられました。そして、相談そうだんをなさつていられたのです。

「なにか、正しょうじ二のほしいものを買かつてやれば、いうことをきくかもしれない。」と、お父とうさんは、おつしやいました。

「さあ、どうでしょうか。二輪車りんしゃをほしいといっていましたから、犬いぬを捨すてたら、買かつてやるといってみましょうか。」と、お母かあさんは、お答こたえなさいました。

「ああ、それがいい、きいてみてごらん。」と、お父とうさんが、いわれました。

お母^{かあ}さんは、さつそく、正^{しょう}ちゃんに、そのことをおつしやいました。

「おまえの好^すきなものを買^かつてあげるから、クロをだれかにやつておしまいなさい。」と、おつしやいました。

すると、正^{しょう}ちゃんは、即^{そく}座^ざに、

「僕^{ぼく}は、なにもほしくないから、クロをやることはいやです。」と、お答^{こた}えしました。

「上^{じょう}等^{とう}の二輪^{りん}車^{しゃ}を買^かつてあげても。」

「二輪^{りん}車^{しゃ}なんか、ほしくありません。」

「いつか、ほしいといったでしょう。」

「それは、ほしいが、クロをやってしまうことはいやです。」

お母^{かあ}さんは、考^{かんが}えていられたましたが、正^{しょう}ちやんが、いつか、野^や球^{きゅう}のミットをほしいといったことを思^{おも}い出^だされました。そこで、
こんどは、

「ミットも買^かって、あげるけど。」と、おつしやいました。

ミットときいて、正^{しょう}ちやんは、お母^{かあ}さんの顔^{かお}を見^みました。

「ミットも買^かってくれるの？」と、お母^{かあ}さんに、ききかえしまし
た。

「ミットも買^かってあげます。」

お母^{かあ}さんが、こ^{こた}うお答^{こた}えなさると、正^{しょう}ちやんは、頭^{あたま}を振^ふって、

「ミットなんか、ほしくない。」と、いいました。

「じゃ、犬^{いぬ}をやめて、伝^{でん}書^{しょ}ばとになさいな、はとは、やさしく

て、そんな悪いいたずらをしませんから。」と、お母さんは、おつしやいました。

「え、伝書ばとを飼つてくれるの？」と、正ちゃんは、目をかがやかしました。

「ええ、鳥屋へいって、買つてきてあげますよ。」

「二輪車とミットと伝書ばとを買つてくれない？」と、正ちゃんは、大いに欲張りしました。

「さあ、お父さんが、なんとおつしやるかしれませんけれど、そうしたら、正ちゃんは、ク口を捨ててしまいますね？」と、お母さんは、念を押されました。

「どうしても、ク口を捨ててしまうの、かわいそうだなあ。だれ

かにやってしまえばいいではないか。」と、正ちゃんししょうは、考かんえて
いました。

「それは、聞きいてみますが、あんなに大おおきくなつた犬いぬをだれも、
もらうものはないでしょう。遠とほくへつれていつて、置おいてくるの
ですね。」

このとき、正ちゃんししょうは、クロと約やく束そくしたことを思おもい出だしまし
た。僕ぼくは、おまえをかわいがつてやるからといったことを思おもい出だ
しました。

「僕ぼく、いやだ、やはり、クロを飼かつておく。」と、きつぱりとい
いました。

「伝書でんしょばとはいらないんですね。」と、お母かあさんが、おつしや

いました。

伝書でんしよぼとときくと、正しようちゃんちゃんは、また迷まよつてしまいました。

犬いぬもいいが、あのかわいらしい目めをしたはともほしかつたのです。それに、はとは卵たまごを生うむからよけいなのです。

「お母かあさん、僕ぼく、考かんがえてみていい？」と、正しようちゃんちゃんは、いいました。

「ああ、よく考かんがえてござらんさいね。私わたしも、二輪車りんしやに、ミットに、伝書でんしよぼとですから、考かんがえてみなければなりません。」と、いつて、お母かあさんさんは、笑わらつていらつしやいました。

正しようちゃんちゃんは、草くさの上うえに横よこになつて、大空おおぞらをながめながら、

「はとと二輪車りんしやにしようかなあ、しかし、クロがかわいそうだ

し……。」「と、いって、考え込んでいました。そして、考えに疲れて、そのまま目を閉じて、じつとしていると、自分を探しにきたクロが、ハツ、ハツと、息を切つて、頭のところへ走つてきたけはいがしました。

「こうして、死んだふりをしていよう。」「と、正ちゃんは、思いました。

クロは、正ちゃんの頭をかぎました。つぎに顔をなめました。正ちゃんは、おかしくて、しようがなかったけれど、我慢をしているとクロは、なんと思ったか、——ほんとうに死んだと思ったのか、急に悲しそうな声を出して、ほえはじめました。そして、また正ちゃんの顔をなめ、起こそうと着物をくわえて引つ張つた

のです。正ちゃんしょうちゃんは、はね起おきました。

「クロ！ 僕は、こんなによさしいおまえを捨すてようなどと思おもつて悪わるかった！ 堪かん忍にんしておくれ、もう、いつまでもかわいがつて、どこへもやらないから。」と、いつて、二人ふたりは、草くさの上うえで元げ気んきよく、相撲すもうを取とつて遊あそんだのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「台湾日日新報」

1936（昭和11）年5月22日

※表題は底本では、「僕《ぼく》がかわいがるから」となっています。

※初出時の表題は「僕が可愛がるから」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

僕がかわいがるから

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>